一隅を照らす

社会福祉法人
北光福祉会
会報

2023. 冬
第9号

旭川空港見学　（北光学園）

仮想ダンスパーティ（向陽園）

マックカフェに行きました（ひまわり学園）

作業後の一服、漬物美味しい！（パオ）

一遇を照らす　２０２３ 冬号　第９号　主な内容

■大地と向き合おう　湯浅　民子…… Ｐ２
■子育て新時代　小田島　護…… Ｐ４
■頑張ってほしい　長谷川育子…… Ｐ４
■空遥さんのひまわり学園で過ごした１６年　徳田　和也…… Ｐ５
■令和５年度の向陽園の活動　金沢　健一…… Ｐ６
■グループホームでの新たな出会い　石川　浩二…… Ｐ７
■健康を願って　野村　幸子…… Ｐ７
■センターもねの活動から　浅野　史晃…… Ｐ８
■地域と繋いでいくために　遠藤　光枝…… Ｐ９
■認められることの大切さ　徳田沙那恵…… Ｐ１０
■ぱすてるを知っていますか？　谷　千洋…… Ｐ１１
■“つながる”を意識して　西川　睦美…… Ｐ１２
■連載コラム　光ちゃんへ　星屋　睦子…… Ｐ１３
■ご芳志のご報告と御礼…… Ｐ１４
■後援会だより…… Ｐ１５
■ハスカップと夢をいただく…… Ｐ１５
■お薦めの本 / 遠信広報誌の表紙に
後援会ご協力のお願い / あとがき …… Ｐ１６

大地と向き合おう

社会福祉法人　北光福祉会
理事長　湯浅　民子

今年、隣町の湧別町の松原農園の畑を借りて豆の栽培をしました。二百坪ほどの細長い畑に、小豆と、手亡（てぼう）を蒔きました。サン・コロネで始めたおやき「ごえんやき」には、小豆などのアンを使うため、その一部になればと思ったのです。作業は、就労支援事業所ほたるのメンバーが中心になり、時には生活介護の利用者なども加わって、この夏の変化に富んだ活動になりました。

六月の始めに、近くの役員も手伝ってくれて種まきをし、途中、何度かの草取りを行い、十月末には刈り取りをしてビニールハウスに入れ、十一月の中頃に、それを叩いて落とすという作業を行いました。

手亡はまだ青いさやも残っていましたが、小豆は乾燥した細長いさやからたくさんの豆がはじけ出て、大豊作でした。

作業を通じて、参加した利用者の隠されていた能力を見させていただきました。

先ず草取り。短いクワ持ち、腰を曲げた姿勢で豆の周囲の草を選んで取るのはなかなかたいへんな作業ですが、高齢のTさんは、上手に作業を進めます。どこで覚えたのかと聞くと、昔、ひまわり学園に居たときに、笹原先生と畑に通って教えてもらったと言います。

十六才でひまわり学園に入所したTさんは、成人施設を経て、今は法人内のグループホームで生活しています。七十才になり、体力の衰えが見られるようになりましたが、子どもの頃に覚えた草取り作業を、嬉々として行っているのです。

収穫後の豆落としの作業は、シートの上に山積みになった小豆を棒などでたたいて落とします。

から竿という昔懐かしい農機具が出されてきて、ためしに使ってみたのですが、うまく使いこなせなくて、一本の回転部分を破損させてしまう始末でした。

唐箕を使って

職員や利用者もためしてみるが、誰もうまく回すことができない。

ところが、ほたるのSさんは、難しいはずのそれを、いとも簡単に使いこなすのです。やはり昔、ひまわり学園などで覚えたと言います。

当時から五十年ほどの歳月が流れ、農作業から離れて久しいのに、少年のころに身に着けた技をしっかりと覚えているのです。

「体が覚えているんだね～」

私は思わずつぶやきました。

「からだが…　おぼえてる…？」

横に居た利用者さんが、ふしぎそうにつぶやきました。

＊

昭和四十年代の、開園間もない若いひまわり学園を思い出します。

障害のある子どもは学校に受け入れてもらえず、ひまわり学園は、教育に替わる指導訓練施設という役割を担っていました。

まだまだ貧しく、最低限の生活保障しかなかった時代で、そのための設備や人手が用意されていたわけではありません。

しかしひまわり学園は、線路と道路を挟んだ向こう側に、離農跡の広大な農地を入手していました。

格好の訓練用地であり、そこに作物を植え、清水基金からの助成金を得て豚舎を建て、養豚をも始めました。子どもたちは、職員と共に毎日そこに通い、農作業や豚の世話などの生産活動に従事したのです。そう、TやSは、その時のメンバーであったのです。

昭和五十年代に入り、その地に、向陽園が建設されて、畑の大半は建物やグランドに変わりました。伴って生産活動は、農業という一次産業から、木のおもちゃ作りなどの加工を主とした二次産業に変化していったのです。

同じころ、養護学校就学義務制が施行されて養護学校ひまわり学園分校が開校され、ひまわり学園の子どもたちは学校に通うようになりました。

つまり、それまで畑や野山など大自然を活動の場としていたのが、教室や、工房、作業場などの屋内活動に変わっていったのです。

離農跡を敷地とした向陽園は、その広さを利用して、畑や林を活動の場とすることができました。

一方のひまわり学園は、狭い限られた敷地に、園舎や校舎などが次々に建ち、大都会並みの狭さの中で過ごすことになりました。

広い向陽園の敷地を利用すればいいようなものなのですが、間に交通量の増えた国道と、特急も走る線路が走っており、実際にそこで痛ましい事故も起きたことから、自由な行き来は制限せざるを得ないのです。

大自然に囲まれていながら、狭い中庭と分校の小さなグランドが精いっぱいで、野球やサッカーなどの球技に興ずるスペースはありませんでした。ましてや、畑のスペースなどはとても確保できなかったのです。

そうした環境で育ったひまわり学園の子どもたちは、園内で過ごすことが多くなり、成人期に達しても室内で過ごす活動が主になりました。昔のように、太陽の光を浴びながら体を動かし、汗を流すという機会が少なかったからです。

ひまわり学園ができて半世紀以上になりますが、狭い敷地の中で犠牲にせざるを得なかったものに改めて気づかされました。さまざまな活動や経験ができる「広い環境」が必要であったと、今さらながら思わされるのでした。

＊

農園を所有している松原祐治さんは、すぐ上の姉の結婚相手で、義兄に当たります。上湧別の屯田兵の末裔で、役場職員を辞してからは、屋敷周りの六反部ほどの土地で、野菜や果樹、花壇を作りながら、悠々自適の生活を送っています。

研究熱心なアイディアマンで、さまざまな作物や果樹を植えて育てています。行者ニンニクを栽培し、春先にはニンニク狩りに人が訪れる隠れた名所になっています。

所有する山林の間伐材を薪にし、消し炭を作っては畑にすき込むなどして手入れされた畑の土は黒々と豊かで、低農薬で作物が実り、味が良いのです。われらの小豆が豊作であったのは、偏にこの地味によるところが大きいのです。

昔ながらの農法で作業が行われ、もはや博物館の展示物になっているから竿や、唐箕（とうみ）が現役で使われています。電力を必要としないかわりに、ひたすら人力にたよるこのやり方には人手が必要とされ、だから利用者たちの出番もあったというわけなのです。

毎年、雪溶けを待って私は、野菜や果物を分けてもらう目的もあり、この農園によく足を運びます。

一足早く、ぬくぬくと暖かいハウスの中で育つ野菜たち、四季折々咲き誇る庭の花々、たわわに実を付ける果樹たちを見ると、何やらしあわせな気分になるのです。

「民子も自給の精神を持たないと」と姉は言い、野菜の苗などを持たせてくれます。しかし、我が家の庭に植えたそれらは、姉のところのように豊かな実りをもたらしてはくれないのでした。

土を肥し、昔と同じやり方で手と目をかけて作物を育てる松原農園にあっては、作物たちも安心して育つことができるのでしょう。

人間も同じかも知れないと思います。変化を進化と思い込み、あくせくと何かを追い、追われる日々。松原農園にきてホッと気が休まるのは、変わることのないものが存在するからなのでしょう。

＊

新たな戦端が中東で開かれました。いったい人間とは、平和であることに満足できない生き物なのかと思わされます。

それでなくとも地球環境は温暖化など悪化の一途を辿っており、人間同士が争っている場合ではないのにと思います。特に食料自給率の低い日本の未来は、深刻な危機をはらんでいるのです。

自然をないがしろにし、便利さを追い求めて、目に見えない情報や科学の進歩に踊らされている私たち。その先に、果たして人間としての幸福があるのでしょうか。

命をはぐくみ、その糧を与えてくれる大地と向き合い、そこと付き合う術をこそ、幼い時から培っていかなければならないのでした。

そう、先のTやSのように、それを体で覚えこんで行く。それこそが、これからを生き抜くために真に必要な力になっていく…。

この夏の豆の栽培で、そんなことを考えさせられました。（了）

子育て新時代

小田島　護

北光学園の付属施設の「きずなホーム」の子ども達と、私が初めて出会ったのは6年程前のある夏の日の事でした。その時、何よりも心に残ったのは、その5～6人の女の子達の明るく元気な姿でした。

その時の子ども達の一人ひとりの表情は、今もはっきりと思い出されます。とかく近頃は、子どもをめぐるあまり良くない暗い話題の多い中で、まるで遠い昔の自分が子どもだった頃のことを思い出し、懐しい様な不思議な気持ちがしたのでした。そしてこの子ども達は、一体学園では、どんな風にして育てられているのか知りたいと思ったことから、学園を訪ね、子ども達や学園やきずなホームで働く方々と交流が始まったのでした。

学園では、子ども達は自分達と生活を共にしている職員の方々を、お母さん、お兄さん、お姉さん等と呼んでいるのですが、それが何の違和感も無く自然に感じられ、そこに深い愛情と信頼関係があって、その上に立って子育てや教育が行われている姿を見たのでした。それは決して、一朝一夕に出来ることではなく、学園の創立者であり、初代の園長先生であった湯浅文治氏の子ども達への深い愛情と確固たる高い理想や信念といったものが、長い年月とその間に様々な多くの苦難を乗り越えてきた結果としての自信となり、見事に結実し、それが今に迄綿々と学園の精神として受け継がれ、伝統となって生きているからこそ出来ることなのではないかと想ったのです。

これから更に複雑化し、高度化する社会に於いて、教育や、子育ての現場でのハイテク機器の利用は様々問題があったとしても避けて通ることは出来ないものと思われます。

しかし、子育て、教育、介護といった分野の仕事は最もヒューマンな行為であり、その利用は十分に慎重であるべきであると思うのです。あく迄もそれらの現場に於ける基本的行為は人間の長い歴史の上に築かれてきた英知の上に立って、行われるべきであり、人の手から手へ、心から心へと温もりを伝えることこそいつの時代であっても大切であると思うのです。

私は、社会に於ける人間関係の基本は、「労り、励まし、慈しむ」といった人の心の力とでも言ったものが最も大切であり、どんなに社会が変化しても大切な事だと思っています。本当に心の込った人と人の向き合い方こそ、今の社会には何よりも必要なのではないでしょうか。

幸い、北光学園の子育てや子ども達の教育の場では、それが実践されている事が素晴らしい事だと思うのです。これからの学園での活動の発展とその成果が社会に於ける手本となり、社会的大きな使命を担い続けていってくれます事を心から願って終わります。

頑張ってほしい

長谷川　育子

私が里親として子ども達と関係を持ったのは、二十年位前になります。母子家庭で子育てをし、子どもも成人しそれまで色々な方々にお世話になりましたので、少しでもお返しできないかと思い、子どもが好きという事もあり、里親になろうと考えたのです。

里親 長谷川さん宅にて

里親になってすぐ子どもを預かれたわけではありませんでした。なので子どもを預かれるようになるまで、北光学園の子どものショートステイを手伝わせていただきました。この事が、米内山園長さんとの出会いでした。これを機に北光学園の生い立ちや湯浅先代のご苦労、深い慈愛を知り、心が震えた事を思い出します。ショートステイは、春、夏、冬休みの中で数日間の事なので何とかなるだろうと安易な気持ちで受けたのですが、色々な環境を通り抜けてきた子どもは、心の様子が見えず難しいものでした。何か話しかけても、「はい」「いいえ」しか返ってこない。

言葉のキャッチボールにならないのです。そうかと思えば異常に明るかったり。親の都合で自由を束縛され学園に来たのだろうに、この明るさはどこからくるのだろう、この幼さで諦めの境地なのか、子どもの健気さにあたりどころのない腹立ちすら感じました。そんなこんなで、もう二十年位ショートステイのお手伝いをしています。小学低学年からのお付き合いから、現在高校生という長い付き合いの子どもは「ばあちゃん」と呼んでくれて外孫の様です。

長期休みの時は来るものだと思い待ち遠しくてたまりません。大学はどこに行くのか、どんな社会人になるのか、社会人になっても遊びに来てくれるだろうかと、考えてもしょうがない事に想いを馳せています。

ばあちゃんの願いはひとつ。「皆頑張って生きてほしい、努力は人を裏切らないから」ね。

空遥さんのひまわり学園で過ごした十六年

歩み寮
徳田　和也

《初めてがたくさんの幼児期》

空遥さんは2歳の時、それまで生活していた乳児院の職員に連れられてひまわり学園に入所しました。まだ小さかったので、女子寮である恵み寮に配属になりました。

当時は活動の一環として乗馬を取り入れていましたが、空遥さんは初めての大きな馬にびっくりして、近づくだけで大泣きしていました。しかし時間をおいて「お馬に乗れたら飴食べようね」の言葉につられて、馬にしがみつきながら乗ることができたようです。回数を重ね、楽しみな活動になった様子が成長の記録に記されていました。

意志がはっきりしていて、変化や、初めてのことには拒否感が強いけれど、一旦納得すると頑張ることができる空遥くんの片鱗が伺えます。

《わくわくドキドキの学童期》

ひまわり学園分校小学部に入学しました。新たな環境のただ中で戸惑うことが多く、気持ちを整理がつかず、彼にとっては試練の多い日々が続きました。職員の指示は通らず、興味本位の行動は時に命の危険にもつながり、運動会への参加は難しかったようです。

秋の分校祭が近づいてきましたが、「分校祭には出ません！」と断固拒否をします。小学生初めての晴れ舞台、楽しい思い出や、成功できた体験を積んでもらいたいのに…。学校の先生も、学園の担当職員も悩んだようです。

そして当日、起床と同時に、発表で使う真っ赤なマリオの帽子と服の衣装を身につけさせて、職員は藁にもすがる思いで登校させたそうです。

はらはらしながら職員や先生が見守る中、発表が始まります。

と、そこには信じられない空遥さんの姿がありました。あれだけ拒んでいたのに、練習した成果を堂々と発表する彼の姿があったのです。

「あの当時の大変さと、あの時の感動が一番印象に残っている。」

当時の担当職員が、目を潤ませながら私に教えてくれました。

《自分の意志で・・青少年期》

私と空遥さんのとの関わりはここから始まります。

思春期真っ盛り。心も身体も成長する時期で戸惑うことも多くあったと思います。気持ちの表現やコントロールが苦手だった空遥さん。この時期にそれらのことを、何度も練習を重ねて学んでいきました。

ある時、空遥さんの気持ちが激してポテトチップスを部屋中にぶちまけてしまったことがありました。落ち着いた後に、一緒に片づけをしたのですが、床がポテトチップスの油でつるつるになり、滑って転んで、一緒に吹き出し笑いしたことを覚えています。

高校の進路選択の時季になり、分校高等部、本校高等部、紋別養護学校などの見学がありました。

「新しい生活がしてみたいね！」

と言い、本来行くべき紋別養護学校ひまわり学園分校高等部ではなく、紋別市にある本校の高等部に入学してみたい、と言うのです。変化に弱く、新しいことが苦手であった彼の信じられない言葉でした。

前例がないことでしたが、「せっかくの彼の希望を何とか叶えてあげたい」と寮の担当者は思い、実現に向けて動きました。新しい学校と寮生活？週末の送迎は？　新しい環境で本当に大丈夫？　などなど、数々の不安があり、何度も話し合いが行われました。そして、紆余曲折がありながらも無事に入学することができたのです。

週末の帰園、各行事や参観日に出席しましたが、私はそこで空遥さんの成長を目の当たりにしました。

「帰りの会」、「居室掃除の割り当て進行」。彼はみんなの前に出て、進行を立派に行っていたのです。迷いや困惑する場面でも、近くの先生に相談して、自分で問題を解決する姿がありました。

気持ちや意思を言葉で表現することが難しく時にパニックを起こしていた空遥さんが…成長を感じる瞬間でした。

そんな空遥さんが、将来に向けて、次の作文を書いてくれました。

―ぼくは卒業したらトマトこうじょうではたらきます　すむばしょはびふかのグループホームです
おしごとしてお金をためてエスコンフィールドにいくのはぼくのゆめです
ひまわり学園のしょくいんさんぼくをそだててくれてありがとうございます　ひまわり学園のおもいではたくさんあります　1番たのしかったおもいでは外出です　みんなで外でやきにくをしたことはたのしかったです。
ぼくはびふかにいってあたらしいおもいでをたくさんつくります―

《これからもたくさんの初めてを》

空遥さん、これからも「初めて」をたくさん経験していってください。そして夢を実現させていってください。いつか新しい思い出を聞かせてくださいね。

令和5年度の向陽園の活動

生活支援員 金沢 健一

暑さも落ち着き、心地の良い秋の訪れを感じられるのかと思いきや、いきなりの冬景色に。

向陽園の利用者さんもようやくに暑さを乗り切り、豊潤な秋を心待ちにしていましたが、突然の冬の訪れに驚ろかされました。寒さで体調を崩さないように気をつけながら過ごしているところです。

さて、いろいろと世間でも行動の制限が緩和されていく中、今年の各ホームでの活動について記事にしてみました。

昨年度までは制限されていた活動が、今現在はどのような感じになっているのか、ということにスポットを当てました。

それでは向陽園の利用者さんが楽しんでいることや利用者さんが楽しみにしているホームのイベントごとについて、さくら・椿ホーム、かえでホーム、しらかばホームの3ホームからご紹介します。

さくら・椿ホーム

生活支援員 大島 澄恵

さくら・椿ホームからは、定期的に行っている外出について紹介していきます。

利用者さん外出の楽しみは、外食・買物・ドライブです。今年度は、久しぶりに外出先で飲食を楽しむことが出来ており、ある利用者さんはお寿司屋さんでメニューを開くと「天ぷら定食」と嬉しそうに選び、注文をしていました。

他にもアイスが大好きな利用者さんは、ドライブを兼ねて食べてくるなどの外出を満喫しています。

こうして外出先で利用者さんの満面の笑顔を見ていると、これが普通のことだと実感しています。

利用者さん達が楽しみにしている外出を、今後ももっと充実させていきたいです。

かえでホーム

生活支援員 中川 健

かえでホームからは、9月に遠軽町で行われたプロレス観戦外出について、紹介します。

この外出については、84歳の利用者さんの「プロレスを近くで観たい」という一言がきっかけでしたが、年齢的にも体力的にも心配なところがあり、この外出は難しいと考えていました。

ですが、大事なのは本人の目線であり、本人の想いを尊重し、何をどうすれば良いのかを考えることなのです。そのためにも周りに相談し、参加者を募って各職員が協力しあい、プロレス団体側の配慮もあり、実現することが出来ました。

利用者の方々も満足されていた様子で、目を輝かせながら観戦し、楽しいひと時を過ごすことができました。今後も、地域のイベントを取り入れた外出を企画していきたいと思います。

しらかばホーム

生活支援員 斎藤 昌司

しらかばホームからは、月に一度実施している、食事会、おやつ会を紹介します。

食事会では、夏のBBQや回転寿司店からのテイクアウト等、普段とはちょっと違った食事提供を企画し、時には利用者さんと一緒に調理を行い、作る時間や待つ時間も楽しんでもらいながらカレーを作って食べたこともありました。

おやつ会では、手作りチョコバナナやプリンアラモード等を食べました。手に付いたクリームやチョコを舐めて嬉しそうにしている利用者さんの笑顔はとても微笑ましく、自分で作ったからこその美味しさもありました。

今後も食事会、おやつ会を企画し、利用者の皆さんが喜ぶ楽しい機会を提供していきます。

グループホームでの新たな出会い

燦ホーム係長
石川 浩二

私事で恐縮ですが、今年の八月に還暦を迎えました。今年度を迎えるにあたり、社会に対して一区切りが出来ると安堵していましたが、そんな気持ちでいた三月頃、燦ホームへの異動を打診されました。

向陽園の職員として約十五年、必死に利用者と向き合い、悩み苦しみながら利用者と共にかけがえのない時間を過ごしてきました。

定年まで残り一年となった自分にとってはまさに「青天の霹靂」でしたが、どこにでもある話だと自分に言い聞かせ、前向きに捉えてお受けすることにしました。

当初、今まで知らなかった利用者やグループホームの体制に慣れずに戸惑いました。利用者さんを知らなければと、毎日、利用者の方の情報と顔写真を見比べて覚え、さらに顔を覚えてもらおうと猛アピールして通所事業所の日中活動にも参加させてもらいました。

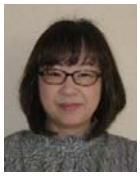
必死になって日々を過ごしていた数か月後のことです。自分の心の中にふと新たな気付きがあることに思い至りました。全く知らなかった利用者でしたが、次第にその「人となり」が見えてきた時、利用者の方は「障がい」が先にあるのではなく、まず人として同じ存在であることを自分は忘れていたのではないかとの思いです。

支援者として、また、人として当たり前のことですが、いつのまにか利用者の方の「障がい」だけに注目していたのではないか・・・。

それに気が付いた時、支援者としてとても恥ずかしい気持ちになりました。でも、この気付きを得たことは自分にとって大変貴重な機会になりました。そして、この気付きは、燦ホームの利用者やスタッフとの新しい出会いがあったからこそ気が付いたことではないかと。

今では、とても感謝しています。グループホームの利用者の方は、次第に年齢を重ねて高齢になっていきます。これからも快適に暮らすことが出来るよう私たち燦ホームは、職員が一丸となって利用者支援に取り組んで参ります。

健康を願って



燦ホーム看護師
野村 幸子

「野村さん、また来月もよろしくね」「また一緒に行ってね」

利用者さんと通院し、別れ際にこんな嬉しい言葉をかけてもらい、元気をもらっています。

「こちらこそ、ありがとう。またよろしくお願いしますね」と伝え笑顔で別れています。

私は十七年間、生活介護事業所「センターもね・スペースもね」で勤務させて頂きました。病院勤務の経験しかありませんでしたので、一から障害のある方の支援を学びました。

利用者さんの性格や特性、持病、配慮しなければならない事、得意な事、好きな事、苦手な事などを日々の活動、余暇時間や行事に触れ、児童期から利用者さんの事を知っている職員からの話しやアドバイスを頂き、今日に至っています。

今年度4月からパオ遠軽、グループホーム「燦ホーム」の保健衛生、健康管理の業務に携わらせて頂いています。健康診断や各科の通院、歯科通院

新型コロナ、インフルエンザ予防接種等を計画し付き添いをさせて頂いています。

通院に関して皆さんは、児童期から経験を積まれ慣れている方もおりますが、やはり苦手な方もおり、説明を丁寧にし、言葉では理解し辛い方には病院の写真カードを見せ説明し、安心して受診してもらえる様にしています。

現在八ホームに四二名、二三歳から五六歳の方が入居されています。「センターもね・スペースもね」に在籍されている方も多くいらっしゃいます。

事業所は異動しましたが、今度は利用者さんの「生活の場」に視点を移し支援をさせて頂きます。

清水副管理者をはじめ、柏谷サビ管、石川係長、生活支援員、各関係機関のお力添えを頂き

利用者皆さんの「健康寿命」（健康上の問題で日常生活が制限される事無く生活ができる期間）が延びる様に努めて行きたいと思っています。

センターもねの活動から

サービス管理責任者
浅野 史晃

今年4月からセンターもね（生活介護）のサービス管理責任者となりました。

センターもね（通称「もね」）は西町にありますが、従たる事業所として、ひまわり学園敷地内にスペースもねがあります。両方合わせて43名の地域で暮らす方々が、自宅やグループホームから日々通所されています。

障がい特性もさまざまで、小集団で活動できる方もいれば、個別の支援が必要な方もいます。

利用される方に合わせた支援をするために、センターもねでは4班、スペースもねでは2班と、活動スペースを分ける環境配慮も行って活動を提供しているところです。

割箸入れ作業、リサイクルで空き缶潰しやシュレッダー作業などのほか、地域にある事業所の特性を活かして、町内にある図書館や体育館の利用、カラオケなどの商業施設の利用も行い、楽しみとなる活動提供をしています。

余暇の支援として、何をして過ごしていいかわからない方や、自身で余暇を見つけられない方もいる事から、余暇支援も行っています。

取組む内容は、選択肢の中から選んでもらうことや、こちら側からのお願いしてることに取り組んでもらった時には、ポイントなどがもらえ、それを貯める事で好きなアーティストなどの写真を獲得できる、などといったモチベーションにもなっています。

その他、役割を決めて洗面台掃除や間食のコップ洗い、食器拭きなどの役割活動もあります。

新型コロナウイルスの影響から、各行事は規模を縮少して、感染防止を優先して行い、活動では楽しみにしている地域のカラオケ施設の利用を中止していた時期もあり、活動の提供自体が不安定になり、またバリエーションが少なくなって事業所内の活動がメインとなり、利用する方々に不便や我慢を強いる日々が続きました。

5類に変更になった事でコロナ蔓延前の様な行事の形に徐々に戻し、センターもね、スペースもねの利用者が合わせて同じ行事に参加する機会も増えてきました。

それぞれの交流が持てることで、以前のように大人数でワイワイと行事が楽しめるようになりました。また、活動面では安定した活動提供が行え、カラオケ施設や図書館などは利用者さんの楽しみにしている活動なので、楽しく活動に参加してくれています。

他にも毎月の作業活動の還元金で自動販売機やコンビニ等に行き、買い物を楽しんでいる活動班では、支給日に、飲み物の選択をできる機会もあり、利用者さんの月に一度の楽しみで、活動のモチベーションにもなっています。

クリスマス会が近づき、最近では、余暇時間に、職員と一緒に装飾作りを手伝ってくれる方もいて、意欲的に取り組みながら、余暇を過ごしている方もいます。

これからも感染対策はしっかりと行いながら、利用者さんの楽しみとなる行事や活動を考え、提供していきたいと思います。

割り箸入れ作業

お昼の配膳

地域と繋いでいくために

サン・コロネ
生活支援員
遠藤 光枝

向陽園での事務員、遊友ほたる（就労継続支援B型）での支援員、遊友えんがる（生活介護）でのチーフを経てこの4月に「サン・コロネ」に異動となり、9カ月が経過しました。

「コロネは、法人と地域を繋ぐアンテナショップの側面があるし、事業所の継続には遠藤さんのこれまで培った経験や実践が活きるから」と数回に亘って、異動打診をされた藤井管理者の言葉を今でも覚えています。

遠軽地域の街中にある「サン・コロネ」は、現在9名の地域で暮らす方々が、グループホームや自宅より通所しています。ご存知のとおり就労支援の側面と「パン」と「お菓子」そして、昨年4月より販売している「ごえんやき」などと製造・販売の両面で成り立っています。

毎月、法人の担当役員でもある長谷川理事も交えての職員会議は「PDCAサイクル」と「チームワーク」の大切さをいつも教えていただいています。

パンの製造すら知らなかった私ですが、ここに綴ることは、日々、通所する利用者と想いを共にするスタッフや管理者との9カ月間の出来事です。

○6月～「豆の栽培」

湧別の松原農園の畑をお借りして、ごえんやきの餡となる小豆や手亡豆の栽培、豆まきから草取り、収穫・脱穀や選別までにおいてコロネも含む地域生活支援パオ各事業所連携で利用者さんと職員で行いました。11月下旬に脱穀が終了。

みんなで育てたという付加価値のある餡として「プレミアムごえんやき」等にして多くの方に食していただければと準備を進めています。

○7月～「千人踊り」～

4年ぶりの千人踊りの開催に合わせて店舗前に出店しました。主力商品である「食パン」「イギリスパン」の美味しさを多くの方々に伝えたく、初めての企画として「試食」を用意。元商工会議所の事務局長である長谷川理事と管理者の二人の共通点は「店屋の息子」。道行く方々に二人は声を掛け、試食を通して美味しさに気付いて頂き、さらに用意したパンを完売できたのは、利用者やスタッフの喜びや達成感になりました。

○10月～ミニパンの販売開始

スタッフの9割は女性です。女性ならではの視点を新商品に込めました。「ミニパン」の開発です。小さなお子さんのいるママさん達より「ちょうどよい大きさで凄く良い」という声を頂いています。10月下旬より試行錯誤しながら「角食ミニ」も販売開始しています。

この他に、私の密かな夢は、法人内の他事業所と連係して楽しむことができるイベントの企画です。

新商品のパンのネーミングを利用者の方々と一緒に考える時間が楽しいひと時。感性あふれる発想に驚き、ネーミング採用になったときの利用者の笑顔も新鮮です。

認められることの大切さって支援において必要なことって痛感します。何よりも個々の利用者の持っている力や技術を活かした支援を展開して、もっとご本人の想いや強みを伸ばしていきたい・・・。

一方、物価等も高騰しているなかですが、パン等の収入増を進めていくことが課題です。利用者の皆さんに支払っている「工賃」の平均は、翌年度の給付費の報酬区分に反映されます。利用者、運営側そして地域にとってもメリットになることが、継続していくうえでの大きな鍵です。売上増、収入増を図って行かなければならないところですので、皆さんよろしくお願いいたします。

地域と繋がるサン・コロネ。もっとアンテナを張り、情報を発信し、多くの方にパンの味、ごえんやきの美味しさを知ってほしく、利用者と私達は日々、向き合っています。

焼きたてのパン

認められることの大切さ

くれよん児童発達
支援管理責任者
徳田　沙那恵

この四月から、くれよんとめるくるの支援管理責任者をしています。

ひまわり学園の一角にあるくれよんには現在、幼児14名、小学生25名、中学生8名、高校生5名、全体で52名のお子さんが利用しています。また、佐呂間町にある「めるくる」では、小学生14名、中学生2名、高校生4名全体で20名のお子さんが利用されています。それぞれの取り組みについてお伝えしましょう。

めるくるでは、社会スキルを達成した際に行われる「お祝い会」があります。お友達の気持ちを考えるということが苦手なお子さんも以前はいましたが、少しずつお友達の頑張りを褒めたり、励ましたりする言葉を自分で考えて伝えられるようになってきました。

担当する職員が普段から子どもたちの気持ちに丁寧に寄り添い、想いを受け止め続けた結果だと感じています。

どんな時でもまず子どもたちの想いを聞くことを職員は大切にして支援に携わっています。これからも、子どもたちの「想い」に耳を傾け、成長を見守り続けていきたいと思っています。

最近、幼児さんの利用ニーズが高まっており、保育所や幼稚園に通いながら、週に1回から2回、楽しみに通ってきてくれています。来所した後は、放課後デイでも取り組んでいる「受付」をします。

あいさつ、その日の活動内容を聞いてからホールに入ります。最初に行うのが、個別課題です。内容はさまざまで、手先の課題、数の認知や運筆、はさみの練習、口のトレーニングなど、一か月同じ内容の課題を個々に合わせた方法で定着できるように取り組んでいます。

保護者の方からも「保育所ではさみが上手になったねと言われました」というお話や「鉛筆に取り組んでほしい」などのニーズを受けながら、個別課題に組み込んでいます。

今年度から幼児さんにも「CSP」を取り入れ、社会スキルの練習を開始しました。

お子さんに合わせたスキルの設定を職員同士で話し合って決めていきます。それがそのお子さんのターゲットスキルとなり、お子さんが頑張る目標になります。意欲的に取り組めるようにポイント表を作り、スキルができた時にそのお子さんが好きな恐竜シールや、すみっこぐらしのシールを用意しました。

そのポイント表を見て、目をキラキラさせる姿を見て職員は感動したところです。

そして、幼児さんとして初めての「お祝い会」を計画しました。スキルの達成を特別なものにし、喜んでもらえるように写真入りの賞状やくす玉、手作りのキラキラメダル、お菓子のプレゼント、職員からのお祝いの言葉など、盛り沢山の内容で企画をしました。

そして、お祝い会当日・・・。

「やさしく貸してと相手に言う」というスキルを達成したお子さん。

恥ずかしがりながら、お友達や職員の前に立派に座ります。職員一人ひとりからお祝いの言葉を伝えると、その子がポロポロと涙を流していました。自分の頑張ったことが認められたことの嬉しさが満ち溢れていました。職員もみんなもらい泣きをし、達成感が感じられたお祝い会となりました。

心や身体がうんと成長する大切なこの幼児期に、人から「認められる」ということの大切さを改めて強く感じることができた瞬間でした。

幼児期、学童期、どのお子さんも、人から「認められること」でそのお子さんらしく成長できるのではないかと思います。

これからも、子どもたちの力を信じ、ご家庭で子育てをされる保護者の方々を支え、職員同士で協力し合い、関係機関と連携を密に図り、「くれよんにまた来たい！」と思ってもらえるようなそんな『くれよん』であり続けられるよう、皆さまと一緒に私たちも成長していきたいと思います。

お祝い会

ハロウィン

ぱすてるを知っていますか？

ぱすてる児童発達
支援管理責任者
谷　千洋

この4月、くれよんからぱすてるの児童発達支援管理責任者に異動になりました。

みなさん、湧別町に「ぱすてる」という児童の通所支援事業所があることをご存じでしょうか？

湧別港の近くの湧別図書館内にあり、幼児を対象にした児童発達支援と、学童を対象にした放課後等デイサービスを行っています。

現在、を児童発達支援を利用している幼児が18名、放課後等デイサービスを利用している学童が11名、計29名の子どもたちが通ってきています。

他の事業所に比べ、児童発達支援を利用する子どもたちが多いのは、湧別町が、乳幼児時期から、丁寧に密に関わり、一人ひとりのお子さんを、とても大事に考え、子育てされているご家族を支える町だからです。以前、保健師の方が『ぱすてるは気軽に相談できるところ』と仰っていたことを覚えています。

子育て中の小さな気づきや不安、心配ごとを誰かと共有・相談できることは、ご家族を助け、支えることに繋がります。保健師、保育士、福祉課、教育委員会、町全体で見守り支える。その中のほんの一部ではありますが「ぱすてる」も、お手伝いをさせていただいています。

ぱすてるにも、くれよんやめるくると同じように、事業方針があります。「子どもに寄り添い、環境を整え、受容共感し、愛情を持って励まします」。これは私たちが大事にしていることの一つです。

この4月に異動になった私も、スタッフの加藤保育士も、ぱすてる勤務は初めてでした。

初めての地での勤務で、緊張と不安でいっぱいの私達に、子どもたちが寄り添ってくれました。また、保護者や関係機関、町の方たちが、受容や共感を示してくれました。たくさんの方々が、ぱすてるに愛情を持って支えてくれました。

環境を整えるためパオの仲間が協力してくれました。たくさんの方の支えがあり、ぱすてるは成り立っていると強く感じています。私たちが大事にしたいと思っていることを、皆さんが示し、導いてくれたのです。

利用している子どもたちは、それは、それは！とても元気で、毎日「おはよう！」「こんにちは！」と笑顔で来所してきてくれます。職員と一緒に遊ぶことが大好きです！そのためのお勉強や活動も頑張って取り組む素敵な子たちです。

最近では社会スキルの練習を取り入れ、ぱすてるではもちろんのこと、保育園での生活や、学校での生活で必要とされる力を身に着けられるよう取り組んでいます。たくさんのご褒美シールを集めるために頑張っているのです！　新しいことを受け入れ、取り入れていく子どもたちの姿には、本当に尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです。

子どもたちが、「もう帰る時間か…」「まだ遊びたかったな…」この言葉が職員の原動力となり、そして励まされています。

子どもたちのため、ご家族や地域の方のために、そして一緒に楽しみ、新たな力を生み出すことのできる、そんな事業所作りを目指していきたいと思います。

4月から約8カ月が経ちました。これから迎える冬の自然に不安を抱える私たちではありますが、パオの仲間たちと共に地域を支え、たくさんのお子さん、ご家族、関係機関を支えられるよう、これからも頑張ります！

みなさん、いつでも大歓迎です！一度、このぱすてるに遊びに来てみませんか…？

ハロウィン

工作の時間

〝つながる〟を意識して

相談支援室
ま～ぶる相談員
西川　睦美

四月から相談支援室ま～ぶるに配属となり、初めての冬を迎えようとしています。

「ま～ぶるの仕事、どうだい？」そう利用者さんや仕事仲間に声をかけてもらうたびに、相談支援という仕事について考えるのです。

相談支援とは、相談者の困りごとについて一緒に考えたり、障がい福祉サービスを利用するにあたってニーズを踏まえて「サービス等利用計画」を作成したり、市町村や事業所等の各機関とのパイプ役、サービス担当者会議の調整などをおこないます。サービス「等」とあるように、単に福祉サービスと結びつけるだけではなく、時には様々な社会資源を有効活用し、ご本人の想いや希望を形にしていきます。

社会資源を活用していくためには、私たち自身が地域のことを知っていることや地域とのつながりが大切となります。そこで、今現在のま～ぶるとしてできることを考え、実行に移してきました。

1．サロンの開設

パオ遠軽という建物を活用し、ま～ぶるサロンを毎月1回、定期的に行うようにしました。（サロンという言葉は堅苦しくなってしまうためあまり使いたくはないのですが、他にしっくりくる言葉が見つからないため、しばらくこのままです（笑）。）地域にいる人が誰でもふらっと寄れる、居場所となる、情報交換ができる、人と人とが繋がる、そんな場所を作りたかったのです。しかし、急にサロンを始めても、私たちのことを知ってもらわないと来てもらえない・・・。

そこで、ま～ぶるのご近所さんに向けて、チラシの配布（大半がポスト投函）を行いました。私にとっては未知の土地でしたが、地図をみて、配って歩きながら、道行く人に挨拶し、声をかける―。

そんな中、時々足を止めてお話しをしてくれる方がいるのです。地域の歴史を教えて頂けたり、障がい福祉やサロンのことを興味深く聞いてくれたり・・・。ある月のサロンでは「ポストに入っていたチラシを見ました」と参加申込みのお電話をいただけたことも。

たかがチラシ配り、ですが、チラシ配りを通して出会うことのできた方々との時間はとても貴重なもので、地域との繋がりができていくことに嬉しさを感じました。

みなさんのご協力のおかげで、6月から始動したサロンは毎月続けてくることができました。今後もサロンをおこなう意味を大切にしながら、積極的に地域とのつながりを増やしていきたいと考えています。

2．インスタグラムの開始

相談支援室ま～ぶるとしてインスタグラム（以下「インスタ」という）を始めました。インスタを活用することで「遠軽町民や他事業所等とつながる、町内や近隣地域の方々に向けて情報発信」そういった機会を創出することを目的としました。

活用を開始してからというもの「インスタ見ました！」とま～ぶるサロンに遊びに来ていただける方がいたり、地域に向けた活動をしている方々とも出会い、実際にお会いしてお話しをすることができたりと、つながりを形にできています。

また、情報発信するということは、まず私たちがそのことについて知るということ。日々、遠軽町内や近隣地域を駆けまわっている私たちですが、普段見過ごしてしまいそうなことにも目を向けるきっかけとなり、新たな社会資源の発見にも役立っています。

直接的な支援であれ、相談支援であれ、一人でできることにはきっと限界があります。人々が集まりチームを作り、みんなで考え地域資源を活用することで、色々な支援の在り方を見つけ、繋げていけたらいいなと思っています。

相談支援室ま～ぶるという環境で様々な経験ができることに感謝しながら、次はあんなことやこんなことなんてどうかな？と考え、ワクワクする日々です。

ま～ぶるサロン、一緒に楽しみませんか？ぜひ遊びに来てください。ま～ぶるスタッフ3人でお待ちしております！

サロン風景

連載 ② ひまわり学園とわたし

光ちゃんへ

星屋　睦子

「光ちゃん、お早う！さあ、今日も、光ちゃんスマイル発揮して明るく元気に過ごそうね」。

光ちゃんが、ひまわり学園に入園した事を書きたくてペンを取りました。お母さんのお話を聞いてね。もう四十七年前のことだけど、そう、光ちゃんが五歳の時、昭和五十一年十月八日、帯広児童相談所の板橋菊治先生の紹介で、ひまわり学園ってどんなところかなあ…って、家族中で見学させてもらったんだよ。

湯浅正邦園長先生、湯浅民子先生の包み込んでくださるようなあたたかい笑顔に、ほっと心が安らぎ、相談にきて本当によかったって思ったよ。民子先生が、光ちゃんのそばに駆け寄り、抱きしめて下さった時、お母さん、胸がジーンと熱くなったよ。

その日から、親戚、先輩の先生方、友達と話し合ったんだよ。

「ひまわり学園にお願いしたほうがいいよ」

「いや、親から絶対に離したらだめ…」

などいろいろな意見が出たけれど、お父さんが「子どもを育てるのに、親の愛情に勝るものはないけれど…親子共倒れになってからでは…」ということで決めたんだよ。

十月三十一日、いよいよ入園という前の晩、光ちゃん熱が出て、行きたくなかったんだね、ごめんね……本当にごめんね。

十一月三日、やっと熱も下がり元気になったので入園の日を迎えたの。新調した濃緑のスーツが色白の光ちゃんによく似合い、とてもかわいかった。

ひまわり学園に着いて、無心に走りまわる光ちゃんに胸がしめつけられる思いだった。

民子先生に抱かれて、お母さんを見送ってくれた、光ちゃんの笑顔、今も忘れない…。

帰りの車の中で泣けて、泣けて、お父さんが、「…光亮の将来のことを考えると、こうすることが一番いいことなんだよ…ひまわり学園に救われたんだよ」と慰めてくれたけど…。翌日、よく寝ただろうか、泣いているんじゃないだろうか…と。電話の向こうで、民子先生が、「お母さん、光ちゃん元気にしていますから安心してくださいね」と慰めて下さっても落ち着かず、光ちゃんのことで頭がいっぱいだった。

入園して一週間目にひまわり通信が届き、その中に、たんぽぽグループの大脇真知子先生のお手紙が入っていて、お心のこもったあたたかなおたよりに、もう、うれしくて何度も読んだよ。

それから光ちゃん、田屋幸子先生のこと覚えているよね。昭和五十四年四月におたよりを下さって、「光亮君、三十八度以上の熱があるにもかかわらず、職員室に本を取りにきて、絵本を一冊あげただけでおとなしく寝床につくのです。そしてそのまま絵本を抱いて寝てしまった光亮君…」お母さん、もう、目がかすんで、それ以上読めなかった…

光ちゃんがお母さんに一番そばにいてほしい時、お母さんいないんだもね。絵本で我慢したんだもね。

ごめんね、本当にごめんね。

退職された先生方の中で、光ちゃんが一番長くお世話になったのが難波雪江先生、いつも先生は、あたたかな眼差しで、お母さんの話しをじっと聞いて下さった。平成二年三月に退職され、五月にお母さん達が集まって、ささやかな〝ありがとう会〟をした時、朴訥に話される先生の一言一言に子供達をおもう気持ちがひしひしと伝わり、胸がジーンと熱くなった…。またお母さん達の話しに、じっと耳を傾け、真剣に聞いて下さる先生の涙をいっぱいためた美しい目は、親の悲しみ辛さを深いところまでわかってくださっているのだと…。

光ちゃんは、お医者様から、自閉症と知的障がいと言われているけど、いつもにこにこ笑っているから、きっと幸せなんだね。

子供は、生まれてきただけで、いとおしく大切な宝、光ちゃんは、皆に幸せいっぱいあげているから、キラキラ輝く宝石だよ。人間って幸せだとにこにこ出来るし、優しい心にもなれるんだね。お母さん、人生で一番大切なことを光ちゃんに教わったような気がする。

お母さん、光ちゃんのあの何ともいえない澄んだ笑顔が浮かぶと、ふわあっと心がやわらぎ、日々の悲しみや辛さも乗り越えられるよ。ありがとう。

お母さん、今日、光ちゃんといっぱいお話しが出来て、スゴクうれしい。

今夜も光ちゃんが楽しい夢を見ますようにって、お母さんお祈りしているから。おやすみなさい。

御芳志のご報告と御礼

令和五年七月一日から、令和五年十一月三十日までの間に、次の多くの皆さまから、法人事業あるいは施設や事業所を利用している子どもや利用者のために役立ててほしいとの趣旨で、寄付金や物品のご寄贈をいただきました。誌面を通じて厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（敬称略・順不同）

寄付金

《北光福祉会》

六車潔　あずま損害保険事務所（以上遠軽町）

《北光学園》

米内山邦子　服部憲尚　橋本政司（以上遠軽町）㈱合田観光商事（紋別市）芳賀商店　土田浩子（北見市）小清水町更生保護女性会（小清水町）横瀬兼二　坂本健（東京都）匿名

《ひまわり学園》

アート美容室（遠軽町）

《向陽園》

池内一秀　アート美容室（以上遠軽町）後藤きよみ（士幌町）塩田久子（網走市）

《燦ホーム》

星屋泰賢（士幌町）

寄贈品

《北光福祉会》

吉川博美　鈴木由美子　遠軽町（以上遠軽町）中川哲夫　松原祐治（湧別町）飯田壮一　岡本千代（北見市）福祉ファミリー（札幌市）

《北光学園》

橋本さとみ　曽我部由紀子　高橋豊恵　二之形祐子　大崎恵美　花岡美和　仁木一好　横山薫　山本峯久　堀江明好　木村よしのり　大熊幸子　笹森英昭　中村シズエ　雲龍真弓　北洋銀行遠軽支店　岸本美代子　埴山和成　吉田久子　亀田商店　ぽっぽや　池田努　大泉勝義　生田原神社　菅野由美子　中野由起子（以上遠軽町）吉口僚子　岩崎勝美　樋口弘子　置田靖子　北見トヨペット㈱　土田浩子　ゼビオ北見店　森良子　長谷川育子　黒川圭子　川畑早苗　原田典朗（以上北見市）宇野聡一（訓子府町）小田島護（網走市）㈱ながさわ（美幌町）石井礼子（置戸町）中川哲夫　大崎邦子（湧別町）牧野京子（雄武町）福井紗耶佳（紋別市）田保杏菜（別海町）岡部晃一（釧路市）太田敏明　梁川勝利（当麻町）柳孝稔（稚内市）北海道社会福祉協議会　㈱セブンイレブンジャパン　㈲オーケー自動車販売　㈲アクト警備オフィス　荒木汪子　松田八郎（札幌市）鳥浜恵理子（江別市）佐藤敬子（豊富町）中澤成美笹田亜里　岩崎知美（旭川市）平田実（深川市）佐藤果樹園（増毛町）㈱ファーストリテイリング　門司一徹松沼豊　全国シャンメリー協同組合（東京都）二俣正光（流山市）㈱フェリシモ（神戸市）㈱光陽社　田中憲一（名古屋市）

《ひまわり学園》

大湧工業㈲　細野石油㈱　茶木建設㈱　小西商店　秦野商店　小山雅人　北見トヨペット㈱　安国神社　本田典子　遠軽町　鈴木恵美（以上遠軽町）中川哲夫　齊藤千香子（湧別町）会田勝男　森谷権三　長谷川善美（以上北見市）杉村正子（網走市）石井宏和（大空町）宇野聡一（訓子府町）坂本美幸（斜里町）柿崎有美（旭川市）佐藤雅人　コドモックル　井筒ひとみ（札幌市）阿部理美子（江別市）

《向陽園》

大湧工業㈲　細野石油㈱　アート美容室　梅澤尚明　斎藤昌司　佐藤冨枝　縄陸博　木内　鈴木由美子吉川征江　山川悟　工藤克哉　小林幾子（以上遠軽町）中川哲夫　阿部勇作　石川清美（以上湧別町）飯田壮一（北見市）島田和男　瀧口貞子水野知一郎　塚田玲子（以上紋別市）馬場洋子　宇野聡一（訓子府町）斎藤久恵（新得町）西沢利秀（小清水町）三澤勝（東神楽町）菅原（旭川市）本田和則（釧路市）佐々木智子（音更町）井村武夫　途中政和鍋田正勝（以上札幌市）永田叙子（東京都）西川千恵子（奈良県）ワタキューセイモア㈱　富士産業㈱　北見トヨペット㈱　アフラック

《遊友やすくに・遊友えんがる》

林明男　坂東耕自　工藤克哉　井筒ひとみ　横井サツ子　温盛幸治大崎喜代志　梶田伸男　伊藤美千子粕谷さつ子　小野寺映子　大森和子浅井宏實　梅澤春美　小林由美　大杉潔　佐藤亘　藤井康成　清水直人三浦美知子　小田明美　坂本宣子鈴木由美子　阿部豊子（以上遠軽町）三品勲（湧別町）東ちづる（東京都）

《遊友ほたる》

梅澤尚明　平間彰　大真寺　丸山信二　清水直人　工藤克哉　鈴木弘志（以上遠軽町）鈴木美智子（湧別町）

《ゆめいく》

内野郁子　鈴木由美子　佐藤昌生長岡春三　村雲美恵　樋口順子　後藤正則　村松真希　堂前正雄　今井美香　幕田昭義　佐藤ゆかり　北岡優平　北見トヨペット㈱遠軽店（以上

遠軽町）金内ヨシエ（湧別町）阿部美代子　八木沼隆春　丸山守　岡本千代　折川重夫　国奥順一　佐藤良子（以上北見市）丸山忠広（美幌町）白川弘行（函館市）大場玲子（さいたま市）

《燦ホーム》

我妻香苗　千葉美佐世　有倉リヨ子　森田千春　鈴木恵美　西原弘福田進　仲野スミ子　高橋捷史　三宮商会（以上遠軽町）土門きみえ田中由雄（佐呂間町）安彦好子　端場洋子（以上湧別町）楠目広志（美幌町）会田勝男　今本勲　西田光子（北見市）白田和博（紋別市）内海惠子　植野博雄（網走市）菱木冨美子（斜里町）森岡陽子（滝上町）森田孝俊（別海町）加藤政伸（苫小牧市）阿部理美子（江別市）

《センターもね・スペースもね》

安西貴美子（遠軽町）廣島真美（紋別市）楠目広志（美幌町）加藤政伸（苫小牧市）

《サン・コロネ》

佐呂間町特別支援学級職員一同

《くれよん・めるくる》

山下大輔　國松大輔　上林藍　岡田勝美　山口貴宏　佐藤昌生（以上遠軽町）

《ぱすてる》

工藤克哉　松尾淳司（遠軽町）湧別町社会福祉協議会　笠間悠史　羽田悠太（以上湧別町）

《ぱれっと遠軽》

安村まり子　鐘ヶ江美由紀（遠軽町）

ボランティア

《北光福祉会》

吉川博美　新山史賢　長谷川光夫　加藤政雄　松原洋一（以上遠軽町）松原祐治　松原栄子（湧別町）飯田壮一（北見市）

《北光学園》

救世軍遠軽小隊　原　修（遠軽町）佐藤善一（増毛町）ＪＡＬボランティアグループ（東京他）

後援会だより

令和五年七月一日から、令和五年十一月三十日までの間に、北光学園後援会及びひまわりの里後援会に、次の皆さまから会費・寄付金等のご芳志をいただきました。ご協力に心から感謝し、誌面を通じて厚くお礼を申し上げます。

（敬称略・順不同）

北光学園後援会

瀧本玲子　青野シマ子　田中文章　加藤幸徳　渡邊公久　上野壽男　寺田貢　吉川産業㈱　遠信生田原支店　高橋秀人　亀田光次　福家貢　平栗建設㈱　橋本政司　佐藤洋哉　多賀憲雄　㈱渡辺組　以西善一　湯浅民子（以上遠軽町）佐野琢（湧別町）北新サッシ工業㈱　小西工業㈱　㈱富田通商　畔柳亭信　遠藤和子　浅井春雄（以上北見市）石澤信勝　後藤哲也（以上美幌町）星屋泰賢（士幌町）家村昭矩（七飯町）友重崇憲（旭川市）四釜剛（恵庭市）堀田里佳　板垣洋（札幌市）肥後剛（さいたま市）

合計　３７０，０００円

ひまわりの里後援会

湯浅民子　六車潔　粕谷さつ子　西原弘　本田典子　松原建設㈱　㈲遠軽清掃社　林明男　大湧工業㈲福田進　望月利昭　黒瀧久子　佐藤洋哉　遠軽町社会福祉協議会　アート美容室　桑山めぐみ（以上遠軽町）丸山守　西田光子　今本勲　中央防災㈱　渡辺裕明　会田勝男　㈱小柳中央堂　船場弘治　松田浪江　堤忠男（以上北見市）塚田玲子　滝口貞子　島田和男　山下常男　白田和博　水野知一郎（紋別市）川地栄子　阿部勇作（湧別町）森岡陽子（滝上町）楠目広志（美幌町）菅野智恵子（津別町）菱木冨美子（斜里町）土門善弘（佐呂間町）森田孝俊（別海町）㈲池田商店（雨竜町）内海惠子（網走市）今野カツ子（恵庭市）吉田さやか　鍋田正勝　途中政和　岩本静夫　須藤利昭　秋保恵治（札幌市）西川千恵子（奈良市）

会費・寄付金合計　６６３，０００円

書き損じハガキ

書き損じはがきや年賀はがきを、ひまわり学園か向陽園にお届けください。

ハスカップと夢をいただく

遠軽町在住の吉川博美さんは、十数年前からハスカップの栽培を始め、遠軽の名物にしたいとの夢を持って増やしてきました。しかしご自身の年齢もあり、夢を引き継いでくれる人を探していることを新聞記事で知り、障害のある人の作業活動に活かしたい、と法人で名乗り上げ、二百五十本余の苗木のご寄贈をいただきました。

十月末の雲一つない晴れの日、法人役職員と、就労系の利用者さんが、吉川さんの指導を受けて植樹をしました。

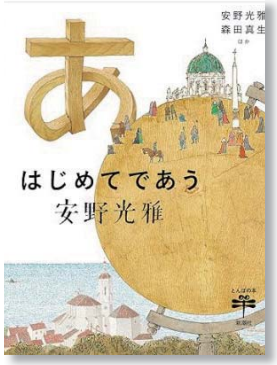
木も夢も、無事に根付きますように。

ハスカップを植樹（前列右から３人目が吉川さん）

お薦めの本

「はじめてであう　安野光雄」とんぼの本

安野 光雄　森田 真生 ほか　新潮社



はじめての出会いは、こどものとも１４４号『ふしぎのこえ』。こどもと一緒に見る。言葉のない絵本。不思議で愉快。子どもとともに私も子どもになる。それから『ＡＢＣの本』『あいうえおの本』『もりのえほん』さらに『旅の絵本シリーズ』など。かべにはカレンダー、本棚には井上ひさしの『吉里吉里人』や、ちくま文学の森『美しい恋の物語』の装丁家としての仕事ぶりが並ぶ。気が付けばいつも安野さんは身近にいた。

私の配偶者は、１９９８年以来、毎晩、彼の表紙『文庫手帳』にその日の出来事を記す。２０１７年１０月、道立釧路芸術館において『空想と旅の画家　安野光雄の世界』を堪能する。２０２０年１２月、彼は９４歳で世を去った。

最近、この本を見つけた。いつも身近にいた安野光雄であったが、「はじめてであう　１００％の安野光雄」だった。皆さんも読んでみませんか。次の文は、安野光雄の言葉です。

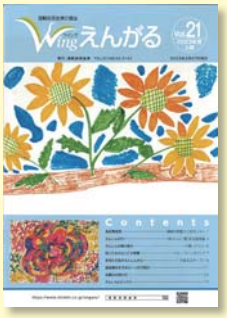
―子どものときから、本を読むことです。本を読むくせをつけておきさえすれば、かなしいことやくるしいことなど、どんなことがあっても、あとは何とかなるのです。―

（理事　新山 史賢 記）

遠信金広報誌の表紙に

パオの利用者さんの作品が地元遠軽信用金庫の広報誌「wing えんがる」の毎号の表紙を飾っています。

楽しくユニークな作品に手に取る人も増えたと聞いています。裏表紙には作者の紹介もあります。



後援会ご協力のお願い

お一人でも多くの多くの方のご支援やご協力を望んでおります。お志のある方、下記へご連絡ください。

○北光学園後援会
☎１５８―４５―２２３３（北光学園）

○ひまわりの里後援会
☎０１５８―４６―２０２０（ひまわり学園）
☎０１５８―４６―２５２５（向陽園）

社会福祉法人 北光福祉会

〒099-0622
北海道紋別郡遠軽町生田原安国302番地7
☎0158（46）2120・FAX 0158（46）2080
ＨＰ：http://www.hokko-fukushi.or.jp/office/
E-mail：office@hokko-fukushi.or.jp

●児童養護施設 **北光学園** ☎0158-45-2233・FAX45-2041
地域小規模児童養護施設 **きずなホーム** ☎0158-45-2206
●児童家庭支援センター **子ども家庭支援センターオホーツク**
☎0158-45-3211
●障害児入所施設 **ひまわり学園** ☎0158-46-2020・FAX46-2080
●障害者支援施設 **向陽園** ☎0158-46-2525・FAX46-2277
●地域生活支援事務所 **パ オ** ☎0158-46-2120・FAX46-2080
パオ遠軽 ☎0158-42-3811・FAX 46-3384
●共同生活援助事業 **ゆめいく**（7ヶ所）　**燦ホーム**（８ヶ所）
●生活介護事業所
遊友やすくに ☎0158-46-2277　**遊友えんがる** ☎0158-42-3389
センターもね ☎0158-42-3720　**スペースもね** ☎0158-46-2120
●就労継続支援Ｂ型事業所
遊友ほたる ☎0158-46-2460　**サン・コロネ** ☎0158-46-7077
●児童発達支援・放課後等デイ **ぱすてる** ☎01586-8-7300
くれよん ☎0158-46-2020　**めるくる** ☎0158-46-7510
●居宅介護事業所 **ぱれっと遠軽** ☎0158-4２-3811
●相談支援事業 **ま～ぶる** ☎0158-46-3383

編集・発行：社会福祉法人 北光福祉会　理事長　湯浅　民子

あとがき

今号は、各施設や事業所の取り組みを紹介します。

コロナ禍のさまざまな制約から解放され、行事などを再開するようになりましたが、まだ、「本当にいいのかな？」という心のブレーキがかかるようで、また３年の間に人も変わったりして、今一つ調子が戻っていないようです。

コロナ禍に閉ざされていた三年間、多くの楽しみや、貴重な経験をふいにされてしまった子どもや利用者さんたちがいます。折しもクリスマスの季節。久しぶりどころか初めてクリスマスパーティを経験する子どももいるはず。気兼ねなく、心置きなく楽しませてあげてほしいものです。この世にはこんな楽しいこともあるんだよ、と……。

中東の紛争のニュースは心が痛みます。世界大戦は終わっても、戦いの火種は消えることなく残っていたということなのでしょう。爆撃に怯え、悲嘆や苦難にさらされている子どもたちを見るにつけ、その幼いこころに憎しみや恨みが植えつけられ、連鎖していかなければいいがと思わされます。

平和の中でクリスマスを祝うことができるこの当たり前に感謝したいと思います。

来年７０周年を迎えるわが法人。さまざまな歴史や人のかかわりや支えの中で今があることを、小田島さんや星屋さんの一文が教えてくれます。その時々、役職員が最善を尽くしてきたことも伝わってきます。この営みを変わらず続けて行くためにも、平和が護られますように……。（湯浅 記）